

## 韓国日本文化学会第51回国際学術大会（2）

朴, 美姪

九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1932024>

---

出版情報 : 九大日文. 30, pp.101-103, 2017-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン :  
権利関係 :

◎イベント・レビュウー

## 韓国日本文化学会第51回国際学術大会(2)

Park  
朴 美姪

韓国日本文化学会 (The Japanese Culture Association of Korea) は、日韓両国の研究者が学術的な交流を通して日本文化のコンテンツを研究・開発する学会である。国際学術大会は、春季と秋季に分けて年二回行われている。また、ソウル／京畿、大田／忠南・北、光州／全南・北、大邱／慶北、釜山／慶南／済州の各地域ごとに前半と後半各一回ずつ、年十回の地域セミナーが行われている。国際学術大会や地域セミナーで発表した研究は、年四回発行される『日本文化學報』に投稿できるようになっている。

今回の第51回国際学術大会は秋季であったため、韓国日本文化学会に所属している会員のみを発表になったが、春季の場合には、「韓国日本語文学会」、「大韓日語日文学会」、「日本語文学会」と合同で「韓国日本研究総聯合会」として開催されている。

筆者にとっては、今回の学会が韓国学会への初めての参加となったが、文学だけではなく日本語学、日本語教育学、日本学（歴史・社会・芸術）などの様々な研究に触れることができた点

でとても有益であった。先の大場健司氏（韓国・朝鮮大学校）は、「日本近代文学」の会場において日本語で行われた研究発表をまとめていたので、ここでは韓国語で行われたものについて簡単にまとめる。

韓国語で行われた研究発表では、村上春樹（一九四九年）、島崎藤村（一八七二—一九四三年）、松本清張（一九〇九—一九九二年）、遠藤周作（一九三二—一九九六年）について論じられていた。

李恵仁氏・尹恵暎氏（忠南大）の『アフターダーク』にあらわれた「両面性」では、村上春樹の作品『アフターダーク』（講談社、二〇〇四年九月）の作中人物である浅井マリと高橋テツヤを中心に、人間の両面性の様相について考察が行われた。マリと高橋に内在している被害意識とそれによってもたらされる他者への加害性は、被害者と加害者の両面性を持つ人間が他者との疎通によって「この世界で個という孤独を治癒」していく姿を描こうとする、作者・春樹の意図が反映されているとの指摘がなされた。

千善美氏（中源大）の「島崎藤村『桜の実の熟する時』論——「母性と母」に対する認識の成長——」では、藤村の青年期を自伝的に描いた長編小説『桜の実の熟する時』（一九四一—一九一八年）を中心に、渡仏前後の「母性と母」に対する認識の変化について考察が行われた。氏の指摘によれば、渡仏以前は藤村の母親を含めたすべての女性が、藤村自身の先入観によって無条件に差別を受けていたが、渡仏以後は「母性と母」だけは脱ジェンダーの範疇に入ったという。そのうえで、藤村の「成

長報告書」といわれる本作品は、「母性と母」に対する認識が混乱していた段階から肯定的に成長したということを証明した「報告書」であり、そうした肯定的意識世界への成長は、後期藤村文学にも多少影響を及ぼしていることが指摘された。

韓基連氏（江陵原州大）の『日本の黒い霧』研究——謀略朝鮮戦争を中心に——では、一九六〇年一月から一二月まで月刊『文藝春秋』に連載された松本清張『日本の黒い霧』に登場する事件・事故について考察が行われた。朝鮮戦争がアメリカの陰謀、積極的な介入によつて起きたとみる清張の見解を中心に、事実関係を確認したうえで、関係者や専門家の見解・評価と作品中に表れている清張の見解・評価を比較する形で分析が進められた。作中に登場する様々な事件・事故の記録を新聞などの同時代資料によつて確認した結果、若干の誤謬があるものの、それは清張に間違つた判断をさせるようなものではないため、『日本の黒い霧』は正確な事実に基づいて描かれたものであると結論づけられた。

安増煥氏（韓南大）の「聖書的観点からみた遠藤周作の『スキャンダル』」では、人間の実存、悪、誘惑・罪、絶望、救済といったキーワードを用いて、作品と聖書がどのように調和しているのか考察がなされた。氏はまず、作品の背景が『新約聖書』の「ローマ書」、特に七章のプロットと一致すると述べ、イエスの使徒として教義を体系化し、キリスト教の世界化に絶対的な役割を果たしたパウロと、キリスト教の荒地地である日本で一生をキリスト教の信仰の主題から離れず、クリスチャン

作家として確固たる位置を占めていた遠藤との類似性を指摘した。さらに、自己の内面に存在する嫌悪すべきもう一つのアイデンティティの問題と、そのアイデンティティに対して嘆息した時期についても遠藤とパウロの共通性を指摘した。そのうえで、『スキャンダル』（新潮社、一九八六年三月）は、遠藤が信仰の旅程から覚つた人間とキリスト教救済に関するマニユアルのような小説であると位置づけられた。

尹惠暎氏（忠南大）の「アイロンのある風景」と「タイランド」論」では、阪神・淡路大震災（一九九五年一月一七日）やオウム真理教による地下鉄サリン事件（同三月二〇日）によつて作家としての「社会的責任感」を痛感し、それを反映したとされる村上春樹の短編集『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、二〇〇〇年二月）に収録されている二編を中心に考察が行われた。傷痕やトラウマを抱える人間の様相とその克服過程を描くことで作品が伝えようとする「新しい価値」とは何かを明らかにするものであった。氏は、春樹は「タイランド」におけるホッキョクグマの逸話を通して「我々は一体何のために生きているのか」という問題を提起しているとともに、「アイロンのある風景」において「重要なのは今だ」という言葉を強調することで、地震と死が「今」を生きている人々の「新しい価値」の探索において重要なポイントであることを示していると指摘した。そのうえで、二つの作品に見られる「生きているが半分は死んでいるのと同じだ」、「死ぬ方法が逆に生きる方法へと導いてくれる」という表現に着目し、一見死の話をしているように見えても、

生と死が対等な関係として記述されていることから、結局は自ら残りの人生を肯定的に生きていくべきだという「生の回復可能性」が証明されていることを読み解いた。

以上、韓国で日本近現代文学研究を行っている研究者の発表内容について簡単にまとめた。

韓国日本文化学会の国際学術大会では、様々な分野で研究を行っている研究者と交流ができるため、研究の学際性を高める場としても意義があるといえよう。実際、会場では同じ分野同士よりも異なる分野の研究者との交流が盛んに行われていた。

筆者もそのような雰囲気の中で、分野の異なる研究者たちに自らの研究について説明したり、相手の研究について質問や意見を述べたりする機会を得ることができた。

最後に、今回の学会でお世話になった吉美顯氏にこの場を借りて感謝申し上げます。今回の学会を機に情報実務理事としてお手伝いさせていただくことになったので、韓国日本文化学会に興味がある方は気軽に筆者まで問い合わせしてほしい。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程二年）